

<はじめに>

このシケプリはレジユメを持っていることを前提に作っています。レジユメは

<http://lecture.ecc.u-tokyo.ac.jp/~cichinoy/>

からダウンロードしてください。資料などは、適宜レジユメのほうを参照してください。

0 Introduction

○「近い」がゆえに「遠い」もの

- ・ 見知る (bekannt) ≠ 認識する (erkannt) (ヘーゲル)

…何かを見知ったものとして前提し、自己解釈する→誤った認識、自分&他人を欺く行為
学問とは、「見知られたもの」を「認識されたもの」にすることであり、そのための方法のひとつとして社会学がある、と言えよう。

- ・ 距離的に近いもの ≠ 環境世界的 (認知的心理的) に近いもの (ハイデガー)

例) 自分がかけている眼鏡と自分との距離

○「見知られたもの」を認識するとは?—「美人」を考える

・ 現代日本の美人：ありふれている、つまり「見知られている」ので、見ても驚くことはまずない。逆に、それゆえ「認識する」のは難しい。

一方で、以下の例で見ていく「美人」は、我々にとって「見知られた」「美人」ではない。しかし「現代日本の美人」にも「パウダン族」の美人にも美人を作り出すある力が存在するのである。

例 1) パウダン族 (ビルマ) の美人

輪を積み重ねて首を長くする風習 (女性限定)

- ① 女性に貞節を守らせる、懲罰としての機能
- ② 富や地位の象徴 (結婚相手としての価値)

⇒ ・ 自分で首輪を外したくても外せない心理的圧迫
・ 矯正に伴う痛み

↓

・ 慣習に従って輪をはめる
= “女性として認められる” という通過儀礼的意味合い

⇒ ・ 首輪をはめる儀式を心待ち
・ 女の象徴である首輪に誇り

例 2) 纏足 (中国) の美人

纏足の風習

- ① 小さな足 = 女性の最も魅力ある特徴 (男性の性的嗜好)
- ② 男性の社会的地位を表す (男のエゴ)
- ③ 妻の不貞を防ぐ

⇒ ・ 大変な苦痛
・ 不自由

↓

・ 豊かさの象徴 → 女の見栄

⇒ ・ 自ら進んで纏足

例 3) 現代日本の美人

- a. ダイエット…「スリム = 美人」という通念 → 摂食障害

b. かかとの高いヒール…足を美しく見せる →転倒の危険、外反母趾

女たちを a や b に駆り立てているものは何か？



社会学的考察…パダウン族の首長美人、中国の纏足美人の例から、共通性を探る。「比較」という手法。

男の視線・恣意的嗜好（例 123 に共通の背景）

つまり、「美人」の背後には、**男性の存在**を考えなければならないのである。これは現代日本においても全く同じことである。

・摂食障害と女性

個人の、社会的規範への対応の仕方は、二通りが考えられる。一つ目が、同調（女らしく「なる」）であり、もう一つが異議を申し立てることで規範を変えさせる、という能動的な力を発揮する（女らしく「ならない」）ことである。

☆日常的（見知られている・近い）**すぎて認識できない現象**（例：現代日本の美人の概念）を、**他の事象**（例 1・2）と比較し、**共通性を見出すことで認識できるようにする**

=社会学の目的

○社会学的想像力

①「**社会的事実 fait social**」(E. デュルケーム)

…個人に対しては外在し、かつ個人の上に否応無く影響を及ぼす事のできる一種の強制力。生物学的でも、心理学的でもなく、「社会的」という名称が与えられるもの。

社会についての科学＝一般人の目に映じるのとは異なった仕方でものをみるようにさせること、通念に逆らい、これを戸惑わせるもの。授業の最初で「美人」について行ったのはこのことである。

②「**社会学的想像力 sociological imagination**」(C.W ミルズ)

…自分の意志でしているはずの生活に実は及んでいる、個人の力ではいかんともしがたい、全体社会の構造から生じる“見えない力（＝社会的事実）”を見抜く力。（→私たちに求められる。）

普通の人々は、自分たちが耐えている苦難を、歴史的変化や制度的矛盾という文脈の中で把握してはいない。例：失業を自分の資質の問題として考え、社会全体の問題とは認識しない。

○「見知られた」空間の「外」に出る方法

①**比較**…自分たちの社会を別の社会と比べる。 ※上述「美人」の例を参照

②**歴史**…歴史をたどることを通して、ある現象の背景などを探る。自分たちの「今」を「過去」と比べる。

③**実験**…普段やっていることをやらない、普段やらないことをやる等。「あたりまえ」を括弧でくくる。

例：違背実験 breaching experiment、blue eyes&brown eyes exercise

④**理論**…「あたりまえ」を普段とは別の言葉で表現する。

例：「家事」を「家事労働」と定義しなおす→ではなぜ家事には給料が支払われないのか？という疑問が生じる。

○社会学（者）の存在拘束性

コント：鏡を通して、常に自分自身を見ていた。つまり、自分自身も社会学の「鏡」の中にいる、という認識を持っていた。

「私たち（社会学者）は、コミュニケーションを欲するかぎり、社会に内属していなければならないのです。」(N.Luhmann) ⇒自分自身はその社会の中にいる以上、**観察者である自己と、観察対象である社会との分離は不可能である、という拘束を、社会学者は持たざるを得ないのである。**

1 社会化 (=socialization) とは何か(1)

○アマラとカマラの物語

※詳細はレジュメ参照。

生物学的な「ヒト」が、「人間」になるプロセスには、何が存在しているのか？

それこそが、**社会化 socialization** である。

この物語は、「ヒト」が社会化の過程を剥奪されたらどうなるのか、という思考実験なのである。

また、なぜこのような女の子が出てくることになったのか？と考えると、インドという社会の中で、「女の子だから」捨てられたのではないか、この二人の存在の中に、むしろ過剰な社会的事実が書き込まれているのではないか？という考え方も可能になってくる。(この点に関しては、第3回の冒頭に見たインドの嫁殺しのビデオも参照。)

○P.バーガー/T.ルックマンの分析

☆**バーガー/ルックマン** (人間の生の3つの位相)

①外在化 (=externalization)

…人間は〈未完成のまま〉生まれてくるがゆえに、その生活様式や生存のあり方を生後、自分自身で構築・獲得していかなければならないという事態。

②客体化 (=objectivation)

…人間自身が作り出す様々な生活様式が、個々人の意思や生を超えて、1つの客観的事実として存在するようになること。

③ 内在化 (=internalization, ≒**社会化 socialization**)

…客観的事実となった生活様式を、人間が他の人間とのコミュニケーションを通じて獲得していく過程。客体化されたものを、個人が自分の中にインプットしていくこと。アマラとカマラに欠けていたのはこれ。

例：言語の恣意性

言語は、世界を分節したものだと言える。どのような分節をするのかは、生物学的に決定されるのではなく、恣意的に決定される。(外在化) しかし、一旦ある言語が作られると、それを変えるのは困難になる。(客体化) そして、そのような言語を生まれてきた人間は習得するのである。(内在化)

[1] 人間は〈未完成〉のまま生まれてくるがゆえに「自然」を超えた「文化」によって補完しながら自らの生活様式を完成させる。

[2] この「文化」は他者との相互行為やコミュニケーションを通じて伝達され、内面化される。

⇒「文化」「他者」とは何か、「相互行為」「コミュニケーション」とはいかにして行われるかを「社会化とは何か」を考える上での前提として理解することが必要。

○ピアジェの発達心理学

①感覚運動期（生後 18 ヶ月～2 歳）＝自閉的段階（autisme）

…外部の直接的世界を「感覚運動的に同化する」（＝自分を取り巻く全ての実行世界を知覚と運動によって征服する）。“動く自分と動かない対象物”という認知が主。

子供が運動できるようになる→運動する自分としない世界が分離していることを認識する→そこで、外側の世界を自分の方に引きよせようとする。

以下の「操作 operation」とは、要は論理的思考のこと。

②前操作期（2～7 歳）＝自己中心的段階（egocentrisme）

…自分との類推でしかものを捉えることのできない、知的自己中心的な直感思考に支配される。→アニミズム思考＝すべてのモノに、自分と同じような魂が存在している、という思考（例：「窓ガラスが泣いた」という表現）

また、他人の立場に身を置いたり、他人の観点そのものから自分自身を考えたりすることができないという、知的自己中心性が見られる。（例：兄弟関係の対照性を否定）

③具体的操作期（7～12 歳）

…自分自身の観点と他人の観点とを混同せず分離し、それらを共応させることができるようになる。結果、共同作業が行えるようになる。

④ 形式的操作期（12 歳～）

…抽象度の高い思考ができるようになる。③との違いは、鶴亀算と方程式を念頭に置けばよい。

<ピアジェに対するワロンの批判>

・前操作期において、ピアジェの理論では説明し得ない現象が多数存在

例) キャンディーの実験（嘘をつく能力、相手がどう感じるかを先取りして考える能力を幼児が有することが実験で示された）

⇒ワロン：子供は自己中心的なのではない、と主張。最初に存在しているのは、共同性（「われわれ」）であって、成長するに従い、他人とは違う「自我」が成長する。つまり、自己と他者の区別ができるようになる。

なお、子供が生きている緊密な共同性のことを、メルロ・ポンティは「めまいのしそうな他人の近さ」と呼んだ。

例：「症状転嫁 Transitivismus」（ウエルニッケ）：自分と他者の立場を入れ替えて考えてしまう。

「投影 Projektion」（フロイト）：自分が他者に向けている感情を抑圧→他人が自分にそのような感情を向けている、と感じるように。

☆実は 2 人とも同じことを言っているに過ぎない。「自己中心性」とは、自己と他人との区別がついていないことを表している。一方で、ワロンの主張も結局、自己と他人との分節ができていないことを表しているのである。

2 社会化とは何か(2)

○ ミードの社会的自我論

☆ミード 社会化の契機→発話行為・遊戯。これらを通じて他者の視点を内に取り込む。

自己の二重化…I=主我、me=客我

➤発話行為

…幼児は発話(=有声身振り)を通して他人に語りかける過程において、自分の声に耳を傾けることで自分の声に対する他人の反応と同じ反応を自分自身の中にも呼び起こす。

人は、それによって構成された「me」(自己の中の他者/社会的な自我)に対し、「I」(主体的自我)として反応する。

子供の独り言は、ピアジェの解釈によると自己中心性の表れであるが、ミードの解釈によれば、自分の発話によって他人がどう反応するかを理解するトレーニング、すなわち他者の視点を作るトレーニングなのである。

➤遊戯

①ごっこ遊び(play) =二つの役割がセットになって行われる遊び。基本的に1対1である。

→自覚的に自分の役割だけでなく、他人の役割を取得する中で、1・2人称の視点を獲得する。

②規則のある遊び(game)

→参加する全ての他者の相異なる役割を相互に関係づけて(組織化して)、3人称の視点を獲得する(=「一般化された他者 generalized others」を発見する)。

(補) 子供が「me」を形成する過程において重要なのは、ミードによると発声であるが、ではろう(耳が聞こえない)の子供はどのように社会化を行うのであろうか?それが「喃語(バブリング)」である。さらに、目も耳も不自由な子供が社会化を行うためには、他のコミュニケーションのモードが開かれることが大事になってくる。

○フロイトの自我論(※ジェンダーの観点から近年厳しく批判されている)

レジュメ p10 の図も参照。

エディプス・コンプレックス: 子どもが親に対して抱く愛憎の複合的感情。母への愛着と父への敵意。

⇒去勢不安・去勢コンプレックス: ペニスの有無の間で揺れ動く感情。

男児: あるものを無くす、女児: ないものを手にする

これが、エディプス・コンプレックスを弱める(抑圧する)働きを果たす。

⇒父親との和解・同一化、母との分離・超自我(ミードの言う me にあたる)の形成

⇒個人を文化社会の一員に連なるようにさせる。

一方、女の子の場合は?

ちゃんとした性器を与えなかったこと・女児として産んだことから、母親に反発・分離

⇒やがてペニスへの願望を捨て、子供を産もうという願望に変容させる。

⇒父親を愛の対象とするようになる。(同一化)

(補)「同一化」について

同一化 *Identifizierung* : 「否定」(禁止等)を含んだ(父親との)同化、「距離」を含んだ同化。

自分を否定するものに同一化することになるので、非常に複雑なプロセスである。

体内化 *Einverleibung* : 前エディプス期の母との密着。

○社会化の諸相

・「社会化」の様々な担い手

…家族、同輩集団 *peer group* (=同じような社会的状況にある人々)、学校、職場、メディア

・様々な「社会化」: 子供時代だけでなく、死ぬまで社会化は続いていくのである。

- ① **一次的社会化**…子供が社会の一員となる過程。すべての人が通過すべきプロセス。例: 義務教育
- ② **二次的社会化**…①の後に起こる全ての過程。これを通じてある特定の社会的世界へと参加する。人それぞれが分化していくプロセス。例: 高等教育
- ③ **再社会化**…軍隊、刑務所、修道院など。

二次的社会化との違いは? : 二次的社会化は、一時的社会化をベースに行われる。一方、再社会化は、**今までの社会化のプロセスを一旦消去し、今までとは全く違った規範を身につける必要が出てくる。**

・「社会化」と「社会統制 *social control*」

社会化…ある社会で共有されるべき価値や規範を次世代へと伝達し、それらを個々人の**人格**として内面化していくこと。

社会統制…ある社会で共有されるべき価値や規範に照らして、個々の**行為**に賞罰を付与すること。「罪を憎んで人を憎まず」などは、「社会統制」の典型的な考え方。

3 「社会化」とは何か(3)

○「自己自身による社会化」—「移植/伝達」モデルへの疑問

☆**ルーマン** 人間は環境から一方的に規定されるわけではない!

自己自身による社会化…社会化は「移植/伝達」モデルではなく、オートポイエーシスの観点から捉えるべきだとする。

「**移植/伝達**」モデル…子供たちが、規範/文化を、一方的・受動的に身につけるのが「社会化」であるとするモデル。

オートポイエーシス *Autopoiesis*…システムのさらなる活動を導き出す状態(≒環境)そのものが、システム自身の活動によって決定される仕組み。

・ミードにおける「me」と「I」—「I」の意味

☆**ミード** **me**によるIへの抑圧からIを解放⇒社会を変化させる力

人間とは、すでに存在している規範をただ受け入れるだけの存在ではない。能動的プロセスも考えなければならない。

○社会〈が〉変わる/社会〈を〉変える

・ローザ＝パークスの抵抗

me→人種差別容認。社会規範（＝白人に席を譲る）に従う。

I→人種差別否定。No!と言う。

内面化された規範（＝”me”）の、”I”による拒否。

・「カミング・アウト」という実践

me→同性愛を否定。完璧な社会的地位。

I→同性愛者としての自己を容認。

「カミング・アウト」とは、”I”に覆いかぶさった”me”を剥ぎ取り、さらには社会の規範をも書き換えようとする試みだと言えよう。

○逆説としての社会化

・コールバーグの実験

☆コールバーグ

① **Pre-conventional Stage** → “自分の利益”が重要。「ハインツは～だろう」

② **Conventional Stage** → “社会の目”が重要。「世間/社会から～だろう」

③ **Post-conventional Stage** → 内面化されたルールを、批判的に吟味する。

・「閉じた道徳」と「開かれた道徳」（H.ベルグソン）

☆ベルグソン

閉じた道徳…不動のものと見られ、自らが最終形態の道徳たることを標榜する、物質化（＝客体化）された道徳。

開かれた道徳…閉じた道徳を純粋な精神性へと広げ、高めていくことのできる、運動性（＝進歩性）を有した道徳。批判的・反省的な目を備えている。人が **Post-conventional Stage** に移行するとき、道徳は「開かれた道徳」となる、と言える。

➤マタイの福音書…現在行われている道徳（＝閉じた道徳）の遵守を説いておきながら、道徳を完成する必要性を示唆し、道徳の書き換えを自覚的にプログラムしている（←逆説的、矛盾すれすれ）。

・「模倣的態度」の「合理的態度」への転換（M.ホルクハイマー）

フロイトのモデルを応用。父親との同一化は、「否定をはらんだ」ものであるから、規範が内面化された後には、子供は現実の父親（「理想の父親」とは異なる）に抵抗するようになる、と考えた。逆説的だが、「父親像」に忠実な者こそが、抵抗する人間となれるのである。

抵抗…真理の要求と存在の非合理を和解させようとする実利的試みに反対。＝合理性追求

服従…理想と現実を対立させることを避け、超自我に忠実に従う。

☆ホルクハイマー 文明は模倣衝動（＝服従）を超越し、その価値を書き換え（＝抵抗）なければならない。＝模倣的態度の合理的態度への転換が必要

- ・もうひとつの声 (C.ギリガン)

コールバーグを批判。コールバーグは、全ての人が Post-conventional Stage に到達できるわけではなく、割合で言えば男子のほうが高いと主張した。だが、それは男性のものさしで測ったからそうなるのだ、と反論したのがギリガンである。

- ・「正義 justice」の倫理：抽象的で個人を超越した規則体系
- ・「ケア」の倫理：人間同士の関わり合いによって織りなされた世界

☆ギリガン

- ①具体的な、面と向かったコミュニケーションを通じた、規範の見直しの必要性
- ②“justice”が抱える問題点を、「ケア」で補完する必要性（つまり、2つの倫理とも、男女ともに必要なものだと考えた。）

- ・「逆説としての社会化」で紹介した3つの概念の対応関係

Conventional Stage	Post-conventional Stage
閉じた道徳	開かれた道徳
模倣的態度	合理的態度

4 家族の社会学(1)

○いくつかの基本理念

- ・「ゲマインシャフト」と「ゲゼルシャフト」(F.テニース)

ゲマインシャフト：計画や意識的な組織化と無関係に成立。

成員は全人格的に相互に結び付けられている。(例：家族)

ゲゼルシャフト：各自が組織の目的に合致する部分だけでこれに加わって結合。

成員は本質的に相互に疎遠。(例：納税者団体、株式所有者)

☆テニース 社会はゲマインシャフト優勢→ゲゼルシャフト優勢へ移行の傾向

- ・5つのパターン変数 (T.パーソンズ)

ゲマインシャフト (Gemeinschaft)	ゲゼルシャフト (Gesellschaft)
community	association
感情性	感情中立性
集合体指向	自己指向
個別主義	普遍主義
属性本位	業績本位
無限定性	限定性

(1) 感情性と感情中立性

好き嫌いによって判断する (感情性) ⇔ その感情を抑える (感情中立性)

(2) 集合体指向と自己指向

自分ではなく他人を含むグループ全体の利益のために行動する（集合体指向）⇔他人のことはどうでもよいとしてまず自分の利益を考えて行動する（自己指向）

(3) 個別主義と普遍主義

えこひいきがあっても良い人間関係（個別主義）⇔誰に対しても平等に接する（普遍主義）

(4) 属性本位と業績本位

自分では変えられない自分の属性（属性本位…性別・年齢や江戸時代の身分制度などがこれにあたる）⇔そのような属性を問わず、能力の有無による人間関係（業績本位）

(5) 無限定性と限定性

トータルな人間関係（無限定性）⇔部分的な人間関係（限定性…例えば、火曜1限の間だけ13回社会Iの授業を受けるという関係がある市野川氏と我々の関係）

パーソンズのパターン変数によって、二分法に陥らない細かな分析が可能になった。

家族とは、一般的には「ゲマインシャフト」だと思われているが、実は「ゲゼルシャフト」的側面との両方を併せ持つ存在である。

・家族の2つの位相

- ① 定位家族…子供世代からみた家族。(ゲマインシャフト的)
- ② 生殖家族…親世代からみた家族。(ゲゼルシャフト的)

・家族の諸形態 (G・P・マードック)

- ① 核家族…1組の夫婦+その子供←基本的単位
- ② 複婚家族…核家族を夫婦関係において連結させた家族。※
- ③ 拡大家族…核家族を親子関係において連結させた家族。
 - 直系家族…子どもが何人いても1人の既婚子のみ同居
 - 複合家族…同居する既婚子を1人に限定しない
 - 夫居制…夫の家か、その付近に住む
 - 妻居制…妻の家か、その付近に住む
 - 双居制…夫と妻、どちらの家(の近く)にも住める
 - 新居制…夫と妻、どちらの家からも離れて住む。
 - 叔父居制…妻の母方の叔父の家(の近く)に住む。

※例：一夫多妻制、一妻多夫制、(理論上の) 集団婚など。

なお、それぞれの制度を取る社会の数の割合(人口の割合ではない!)は、81%、1%、0%であり、一夫一婦制は18%である。

しかし…

子どものいない家族や、「子居制?」(fililocal) =子どもが親を呼び寄せて同居する形態、にも注意。

○日本における家族の変容と動向

- ・核家族化の進行(?) ※レジュメの図参照

A：夫婦のみ、B：夫婦とその子ども、C：単親とその子ども、

D：その他の親族世帯（三世代同居など）、E：単身世帯

日本は「核家族化」している、と言われるが、厳密な意味での「核家族」(B)は、1970年代以降むしろ減少している。日本の国勢調査では、A・Cも含めて、広義の「核家族」と定義するのである。

戦前日本では、直系家族・夫居制が一般的（次男・三男は家を出なければならない）であったため、核家族は多かった。

☆「核家族化」の内実

三世代同居を含む、親族世帯の減少・単身世帯、夫婦のみ世帯の増加

単身世帯、夫婦のみ世帯の増加は、高齢者でこのような世帯が急増していることが大きく影響している。

・離婚の動向

仮説：ゲマインシャフト的要素の強い前近代社会では離婚率は低く、ゲゼルシャフト的要素を強める近代化と共に、離婚率は高くなっていく。

←これは本当か？

レジュメ p19 のグラフを見てみるとそうとも言えない。

疑問1：なぜドイツ・アメリカよりも、近代化という観点から言えば立ち遅れていた20世紀の日本で、離婚率が高かったのか？

疑問2：明治政府は近代化政策を進めていたにもかかわらず、なぜ1930年代まで離婚率は減少したのか？

「家」制度のもとでの離婚率はきわめて高かった。夫の親の気に入らぬ嫁は、容易に離婚されてしまっていたのである。例：貝原益軒の「七去の定め」

⇒福沢諭吉による批判

- ・フリー・ラブの精神（親や家の意向ではなく、男女間の純粋な愛情による恋愛）が大切。
- ・簡単に離婚できる制度はよくない。（cf.西洋諸国、特にカトリック諸国では、離婚が認められるのは難しい）

要は、封建的家族制度をやめ、フリー・ラブの精神を持って近代化を進めなければならないという批判である。

これが、疑問1への答えである。次に、疑問2を検討しよう。

福沢の主張が正しいと仮定すると、1930年代まで離婚率が減少したのは、日本の近代化の表れ、ということになる。しかし、実際はそうではない。

・川島武宣

戸籍制度の日本への定着

→「戸籍を汚す」ことを忌避するように。（cf.定着前の明治初期は、正直に結婚・離婚を申告していた。）

→子どもを産むなどして、家に「消化された」ときに初めて、戸籍上にその家の一員として登録されるようになる。戸籍上結婚する前の離縁は、実情としては頻繁に行われていた、つまり、「見えない形での離婚」が行われていた、と思われる。

これが、疑問2への答えである。

☆まとめ

日本…欧米とは異なる理由による、離婚率の高さ = 「家」制度

5 家族の社会学(2) — 日本社会と家族

この回のテーマは、「家族に焦点を当てることで、日本社会の特徴が見えてくる」ということである。

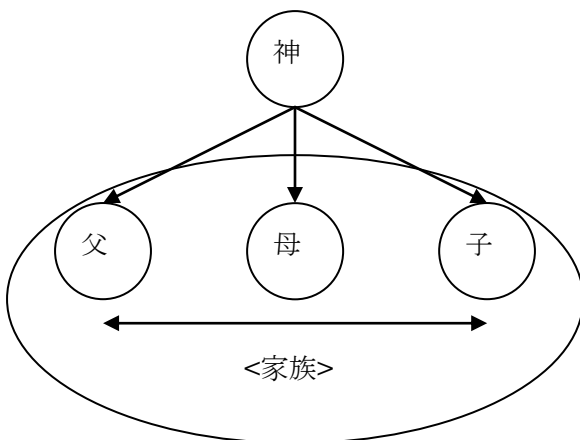
○「民法出デテ忠孝減ブ」 — 明治の民法典論争

明治時代、不平等条約の改正のために民法、刑法、明治憲法などの制定が急がれた。民法を作る際の最大のアドバイザーが「お雇い外国人」ボアソナードであった。ボアソナードによる民法典は公布までいくが、民法典に反対する勢力によって施行には至らなかった。その反対派の中心が穂積八束であった。穂積八束の見る西洋（キリスト教）：神の前では皆が平等という水平的なつながり。

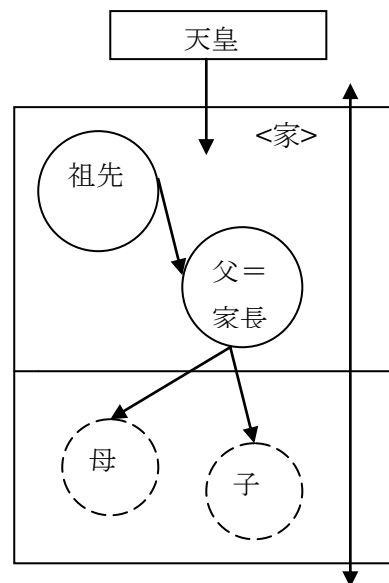
例 マタイによる福音書：キリスト教は、家族という枠組みを一旦解体し、神の下で再編。

一方、日本（祖先教）：家長は祖先の霊を代表し、絶対的な権利（家長権）を持つ。そして、妻や子供はそれに服従する。家の上には、当然天皇が存在する。つまり、全てが垂直的な関係。

八束の見たキリスト教



八束の見た日本（祖先教）



義務・権利の明確化によって個人の間を規定したボアソナード案に穂積八束らが反対したのは、下位の者（妻や子）が目上の者（夫や親）に対して権利を持つという点に耐えられなかったからであった。

なお、明治日本の近代化の中で、「家」制度などの伝統を強化しなおす動きが起きた。儒教的な側面も持つ「祖先教」を、日本に全く独自なものだと穂積が主張したのも、その表れである。

・「個人主義」対「集団主義」

この世で最高の価値をもつもの： 西洋では**個人**、日本では**集団**（＝「家」、「国家」）

・明治民法における結婚：「**複婚**」が**一般的**な社会

男子の相続者 ⇒ 戸主の地位、祖先のまつり、財産を含む相続（家督相続）

…男子を設けない＝不孝 → 相続者確保のため、実質的に「妾」を容認。

道徳尊重を強調する元老院議員から、妾を禁止する刑法典の案は猛烈な反対を受けた。

・非フロイト的家族

日本の家族制度は、親子の関係を基礎とする。

→母親の子どもに対するひたむきな愛情

→**子どもが精神的に乳離れして、独立した個人となることを妨げる**。また、結婚によって息子の愛情が妻に割かれることを耐えがたくする。→嫁姑対立

cf.フロイト的家族（復習）

子は母に愛着を持っている。父には敵意を持っているが、その父を乗り越えたときに独立した個人として社会に出て行く。

フロイトの理論は、福沢の言うフリー・ラヴが成り立っている（夫婦関係が強い）ときに説得力を持つのであって、**母子の関係が非常に強く、両者が分離するかどうか分からない日本社会**においては成り立たない。つまり、日本社会におけるsocializationのあり方は、フロイトの理論によって説明するのは難しいのである。

○「家族国家」としての日本

・イデオロギーとしての「家族国家」

「家」という概念を広げることで、「国」という概念にもなる。家や国は営利会社（＝ゲゼルシャフト）的な存在ではない。「**国すなわち家**」

天皇と臣民の関係も、支配服従関係（個人主義的・相対的人格関係）ではない。

没我帰一の関係（君臣一体） → 日本は「**家族国家**」、「**忠孝**」を重んじる。

cf.ヨーロッパでは、state と family は全く別の概念。

ドイツ・イタリアと軍事同盟を結んだ戦前の日本も、このような「家族国家」概念は日本独特のものであり、ナチスドイツの国家のあり方をも間違っている、という主張をしていた。

・戦死における国家と家（族）

（森岡清美『決死の世代と遺書』参照）

中佐は国体とか父といった話はせず、戦争で死ぬのは母や妹たちのためと言うことで生徒たちを国家のために使えた→生徒の中では家族イデオロギーがうまく機能している→「**家族国家**」イデオロギーの**成功**（？）例

(柳田國男「先祖の話」参照)

柳田は戦没者を弔う場として靖国神社に触れていない。これは、死者の魂をも国家が独占していた状況への一種のプロテストなのであり、若者は自分の家族のために死んだのだから、家を単位に弔うべきと考えたのだろう。→失敗例

国家と家族との間に無視できない亀裂があったのである。

・「ネーション」を拒む「家」—優生政策の挫折

ドイツの遺伝病子孫防止法（1933）と、日本の国民優生法（1940）は、ほとんど内容は一緒なのに、実際の実施のされ方は全く違ったものであった。（ドイツ：40万人以上、日本：数百人）

議会の保守派の議員から、「子種を立つ断種は日本の国是である天皇を中心とした家族国家主義や多産奨励に反する」といった反対意見が上がったことから分かるように、日本の「家族国家」においては、「家」が「国家」に優越していたのである。

一方、ドイツの国家社会主義（Nationalsozialismus=ナチ）においては、“Familie”は“Nation”に従属していた。

6 家族の社会学(3)—フェミニズムから見る家族

○「家父長制」という構造

家父長制=男性の女性に対する支配の構造

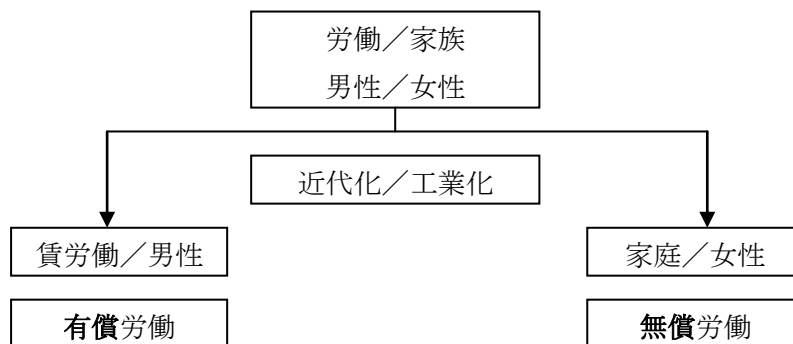
・近代化と家父長制

前産業化社会—生産活動と家事活動が一体…家庭内では女性の影響力大。

↓近代化・工業化

近代社会—賃労働（有償労働）と家庭（無償労働）に分離

⇒性別役割意識（男=仕事、女=家庭）の固定、お金を持たない女性が、持つ男性に従属するように。



・「市場」「家族」と「男」「女」

近代主義的な「人間」概念 … 健康な成人男子のみが、「市場」にとって意味のある人間

子供=人間以前、老人=人間以後、女性=人間以外

→「人間でない」人々の創出、排除（=市場からの疎外）

cf.工場法：児童労働の禁止、女性労働の制限

→弱者保護という側面も確かにあったが、市場における女性の居場所を奪っていったという見方も可能。

○売春婦と主婦

買売春は①性の二重基準、②女性の経済的従属、から生まれるのであり、①から参政権の要求、②から経済的自立の要求が生まれることとなる。

・性の二重規準（ジョセフィン＝バトラー）

☆ジョセフィン・バトラー

伝染病法の撤廃を求める運動をした人物。

対女性→厳しい貞淑を求める

対男性→多数の女性との性的関係を認める =性の二重規準

→売春婦は被害者。責めるべくは買う側の男性。

→非対称な法、売春制度を撤廃すべき。女性が抗議するためには参政権が必要。

=フェミニズムの動機

・「主婦」と「売春婦」（H.シュテッカー）

☆シュテッカー

経済的自立を阻まれている（=市場から疎外されている）点で主婦と売春婦は同じ。

→女性の“市場”への参加、つまり女性の経済的自立が不可欠。

cf.「売る売らないは私が決める」

「売春をするかどうかは女性の自由意思に任せるべきだ」との主張。

しかし、女性に売春をさせるような、社会全体の「力」とは一体何なのか？ということを考えるのが、社会学の役割なのである。←「社会学的想像力」（初回参照）

○データで見る男女格差 ※レジュメのデータ参照

・労働力率にみる男女格差

労働力率=労働力人口÷（当該）人口総数

※用語の整理

15歳以上人口	労働力人口	就業者	従業者
			休業者（育児・介護休業など）
		完全失業者	
	非労働力人口	通学	家事（主婦など）

失業者や休業者も、職を求めている限り、「労働力人口」に参入されることに注意！

日本では「M字カーブ」が見られる。これは世界で一般的な傾向とは言えない（p27 一番上のグラフ参照）。つまり、M字カーブは日本独特の現象だと言える。

日本でも国際婦人年（1975年）や男女雇用機会均等法（1986年）によって、就業率については女性の社会進出も促す一定の効果を挙げた（p27 真ん中のグラフ参照）。しかし、男女雇用機会均等法は、男女の職種分離を実質的に温存する結果を生み、賃金格差やM字カーブは解消されず、**女性の周縁化**が進行することとなった。

・賃金による男女格差

日本における女性の賃金水準の推移：レジュメのグラフを一見すると、増加しているように思える。しかし縦軸を注意して見てみると、一番下が52%、一番上が68%となっている。つまり、これはグラフのマジックであり、実際の上昇は誤差の範囲なのである。

各国の女性の賃金率：先進国だからといって平等というわけではない。むしろ、男女の賃金格差は、「中途半端な先進国」で最も大きくなる。そして、スウェーデンのような、先進国中の先進国と言える国では、格差は是正されることとなる。なお、フィリピンで格差が非常に少ないのは、地位の高い職種のみデータを集めたから、または、男性の賃金も低いから、という説明が妥当のようである。

就業と家事：共働き世帯の夫のほうが、妻が専業主婦である世帯の夫よりもむしろ家事の時間が少ない。結局、共働きをしているということは、生活が苦しいことを意味しているのであり、夫が家事をする暇はない、ということがこのデータからは窺える。

（以下はレジュメに無い追加分）

年齢階級別の女性賃金率：若い頃は格差が少ないが、50歳前後にかけて格差が広がっていく。これもまた、労働力率のM字カーブと無関係ではないだろう。

世帯人員一人あたりの平均所得金額

全世帯・・・207.1（万円）

児童のいる世帯・・・164.6

母子世帯・・・87.6

→OECDの指摘：約80%が就労しているが、その約半数が非正規雇用。また、就労しているシングル・マザーの約60%が相対的貧困状態（＝平均所得の半分以下）。（2006年、OECD諸国の平均は約20%）

厚生年金等の分割制度：年金生活者の妻が夫に依存することなく、個人として自立できることを目指す。

#7 宗教の社会学—M.ヴェーバー①

☆デュルケームとヴェーバー

二人とも、社会学の父と言える人物だが、そのものの見方・立場は対照的である。

デュルケーム：方法論的集合主義（後日）

ヴェーバー：方法論的個人主義（個人は意味のある行動の唯一の担い手である、という考え方。）

しかし二人は、社会学の基礎概念を形作っていくうえで、「宗教」に注目した点で共通している。

○方法としての「理解社会学」

・「意欲する人間 *der wollende Mensch*」

「人間の意志は一つの目標を必要とする。そして、それは何も欲しないよりは、まだしも無を欲する。」
 (ニーチェ) ⇒ ヴェーバーに影響を与えた。

人間は常に何事かを「意志」する。「意志」こそが人間生活の基本であり、人間が何を「意志」しているかを解明することが社会学の研究対象になる。

・「理解」という方法

「シーザーを理解するためには、シーザーである必要はない。」

人間の行動→理解可能な形で解明しうる⇒「理解社会学」の真髄

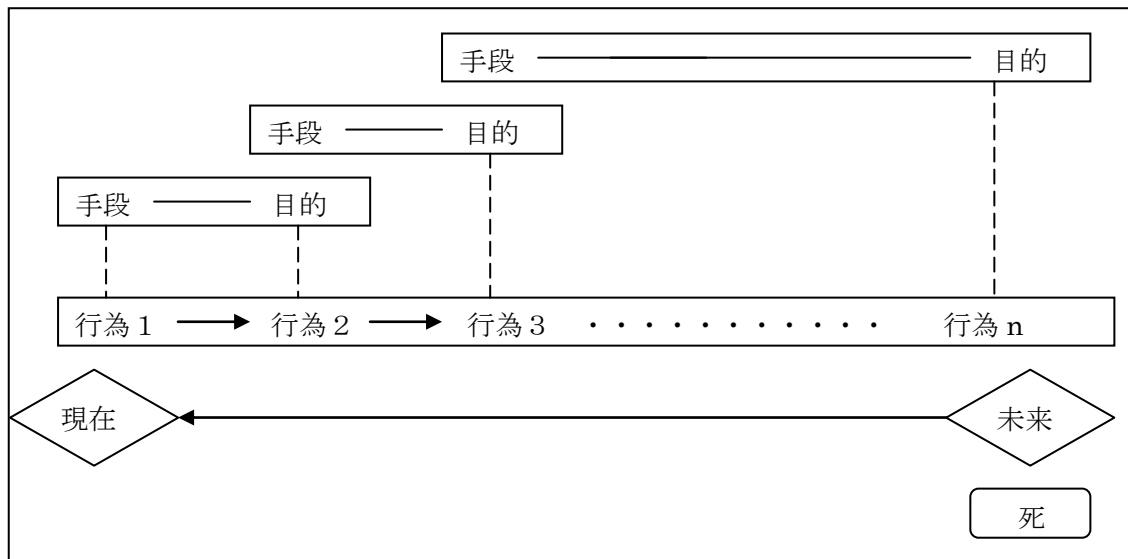
例：犯罪捜査

ある犯行の解明には、物証と動機の解明が必要である。ある行為の「理解」は、犯罪捜査における「動機」に相当するものと言える。

・「目的合理的 (*zweckrational*)」理解…人間の行動をその行動の目的から、合理的に解明すること。

目的非合理的なもの (= 究極的な目的) の作用範囲を測定するのに役立つ。

例：なぜあなたは社会 I の授業に来ているのか？→東大を卒業したいから。→なぜ東大を卒業したいのか？→いい会社に就職したいから。→なぜ…？→…から。→なぜ…？→……



・目的「非」合理的なもの (*das Zweckirrationale*)

行為の目的—手段の連関をたどり、「目的合理的な理解」を突き詰めていったときにつきあたる、それ以上合理的に解明することのできない究極的な目的・未来=死

→意欲する人間は「究極的な〈価値〉と生の〈意義〉」を求める⇒宗教へ行き着く。

つまり、ヴェーバーの「宗教社会学」は、方法としての「理解社会学」によって必然的に要請されるべきものだったのである。

○プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神

・ベンジャミン＝フランクリンの言葉

「時間は貨幣だ」「貨幣は増殖し子を生むものだ」「信用に影響を及ぼすことは注意しなければいけない」

「自分の手元にあるものがみな自分の財産だと考え、そんなやり方で生活しないように気をつけなさい」

⇒資本主義の精神：自分の資本を増加させることを自己目的と考えるのが各人の義務だという思想。

ここで言う「自己目的」とは、まさに前で述べた「目的非合理的なもの」に相当する。

・Beruf/Calling という概念

職業義務 (Berufs-pflicht) の思想：自分の「職業」活動を義務と意識すべきだという義務の観念。

・伝統主義 Traditionalismus : 習慣となった生活を続け、それに必要なものを手に入れることだけを願う傾向。

「資本主義の精神」は、各地域・時代に普遍的に存在していたわけではない。伝統主義は、資本主義の精神の広がりに対する大きな障壁となった。

例：出来高賃金制

通常は…

$$1 \text{ マルク (@エーカー)} \times 2.5 \text{ エーカー} = 2.5 \text{ マルク}$$

期待としては…

$$1.25 \text{ マルク (@エーカー)} \times 3 \text{ エーカー} = 3.75 \text{ マルク}$$

しかし、実際には…

$$1.25 \text{ マルク (@エーカー)} \times 2 \text{ エーカー} = 2.5 \text{ マルク}$$

伝統主義の考え方を持つ労働者は、2.5 マルクあればよいと思い、賃金率を引き上げると労働量をむしろ減少させる。これは資本主義の精神とは相いれない思考法である。

ヴェーバーによると、伝統主義のほうがノーマルな考え方である。資本主義の精神が生まれるためには伝統主義を突破する機会が不可欠であった。その機会こそが、「プロテスタンティズムの倫理」、とりわけカルヴィニズムの倫理であった。

・「プロテスタンティズムの倫理」

➤➤カルヴィニズムの(二重) 予定説

予定説…全ての人について、心が救済されるかどうかは神によってすでに決められているとする教義。

➤➤超越神—徹底した不可知論

徹底的不可知論…予定説の中で自分が救われる対象であるかどうかを人は決して知りえないという事。

➤➤信者の孤独化・無力化

予定説で救済されるか否かはすでに決まっており、人間の干渉は不可能(何をしても運命は変わらない)

⇒個々人のかつてみない内面的孤独化の感情が生まれる。聖礼典・教会・さらには神さえも信者を助け得ないのである。

・手がかりとしての「職業労働」

予定説・徹底した不可知論の中で、信者は、どうすれば自分は神によって選ばれている（救済される）という確信を持てるのか、という疑問を持つ。

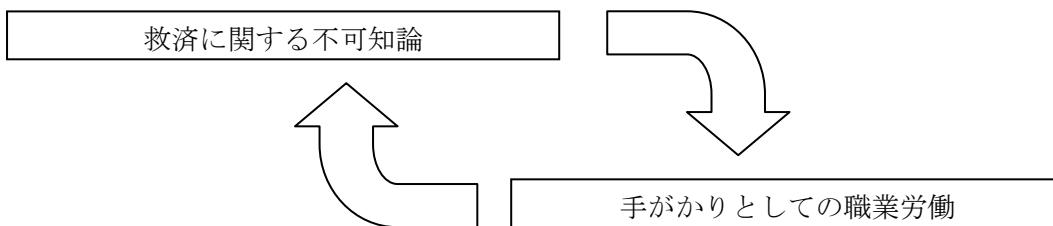
⇒その際の2つの類型

①誰もが自分は選ばれているのだとあくまでも考えて、すべての疑惑を排除することを義務づける（ルター派の考え方に近い）

②絶え間ない**職業労働**をきびしく教えこむということ。（カルヴァン派の考え方）

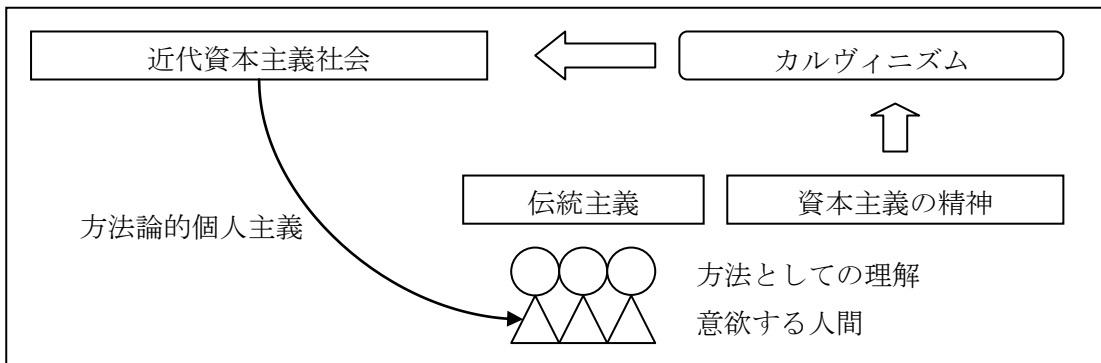
そして、②に従った人々の中から、「資本主義の精神」が生まれることとなったのである。

・カルヴィニズムの構造



「職業労働」はあくまでも「手がかり」である。最終的に自分が本当に救済されるかどうかは分からないのだから、いつまでも強迫的に職業労働を続けることになる。＝自己資本の増加を義務として考える「資本主義の精神」の誕生。

・まとめ

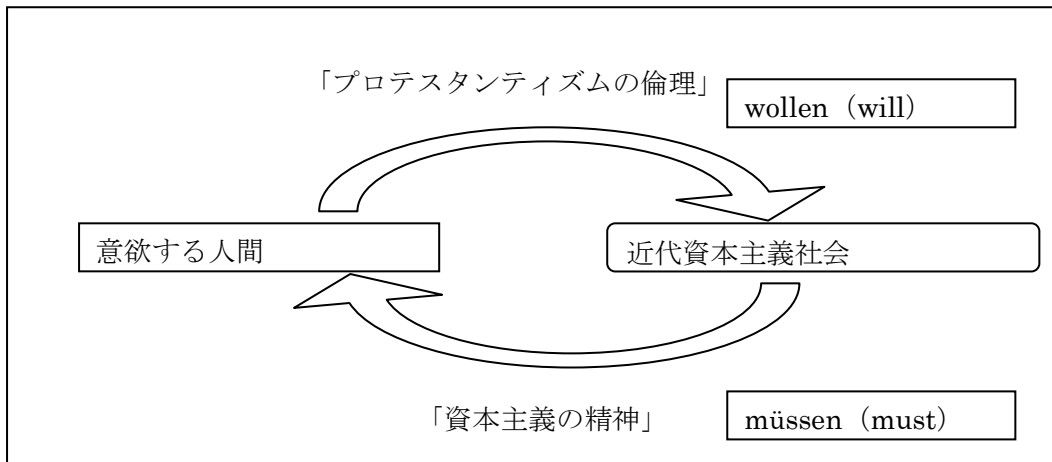


8 宗教の社会学—M,ウーバー②

・ある逆転—「プロテスタンティズムの倫理」と「資本主義の精神」

前回扱ったように、ウーバーは両者を因果関係でつながったものとしてとらえていた。しかし「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」の最後で、両者の間にはある**非連続性・断絶性**があることも指摘しているのである。

ピューリタンは「救済されたい」と**欲し (wollen)**、能動的に「資本主義の精神」を作りだした。しかし現代の我々は逆に、その作り出された「近代資本主義」に従わざるを得ない (**müssen**) 状況になっているのである。これはまさに、バーガーのいう客体化 **objectivation** (# 1 参照) に当たるであろう。



ウーバーは「目的合理的人間」＝自分の資本を少しでも増やそうとする人、を探った。
←目的非合理性（ウーバーが最終的につきつめたかったもの）にまでさかのぼるため。

人間の目的「非」合理性＝「究極的な価値と生の意義」

そして、それを失ってしまった（＝もはや星を生まなくなる）人を、ニーチェは「末人」と呼んだ。

ウーバーの意義：「ホモ・エコノミクス」の相対化

↑	↑
目的合理的人間	そのような人間だけが人間のあり方ではない！
経済学では自明	経済学とは違う、社会学の存在意義。

○世界宗教の比較社会学

ウーバーは、ヨーロッパだけではなく、世界の様々な地域において、どのような「究極的な価値と生の意義」（目的「非」合理的なもの）が存在するのかを考えようとした。具体的には、キリスト教・儒教と道教・ヒンドゥー教と仏教・イスラム教・(古代)ユダヤ教の5つについて考えようとした。（しかし、途中でウーバーは亡くなったため、イスラム教についてはまとまった文献は出ていない。）

・中国の宗教—儒教とピューリタニズム

儒教とピューリタニズムは、ともに深い非合理的な根底をもつ。しかし…

<儒教>

「**社会の秩序**」と「**自然の秩序**」を重ね合わせ、後者の乱れの中に前者の乱れを見る。(例：『搜神記』『京房易伝』：世の中で起こる不思議な出来事に注目した書物)

⇒ウェーバーは、これを「**呪術**」と呼んだ。

⇒**伝統の不可侵性・現世への順応・伝統主義の温存**につながる。

<ピューリタニズム>

現世を超越する神のどこまでも究めがたい決断が根底にある。

⇒伝統には何の神聖さもなく、所与の現世を倫理的、合理的に支配し統御していくという不断の作業をするべきとの考え方が生まれる。=**現世の合理的改造**

・インドの宗教—ヒンドゥー教と仏教

<ヒンドゥー教>

サンサーラ（靈魂輪廻）：万物は、生まれては死に、生まれては死に、…をくり返す。

カルマン（因果応報）：ある生での行いが、次の生での行いを決定する。

カースト秩序：それぞれの生において、カースト秩序を遵守した生活を送らなければ、次の生で上のカーストに行くことはできない。

⇒**伝統の不可侵性**

<仏教>

ヒンドゥー教からの脱出運動としての性格を持つ。

「悟り」や「出家」といった手段によって、ヒンドゥー教の輪廻からいかに逃れることができるか、というのが、仏教の教義の基本である。

・救済の2つの方向

①**模範預言**（インド・中国）…**瞑想的**

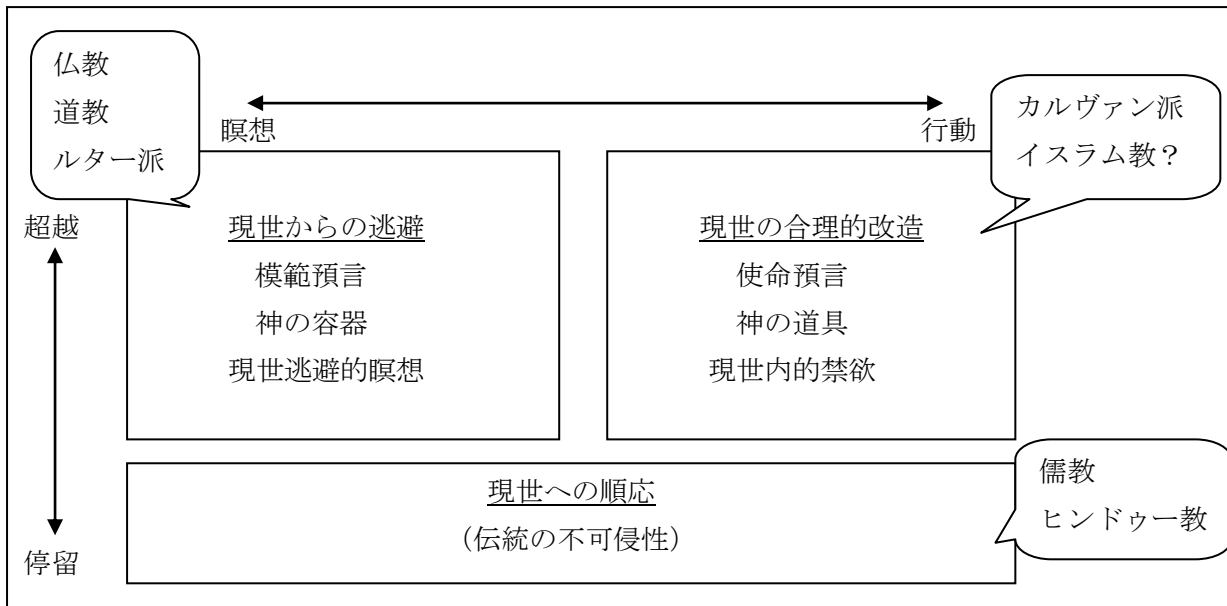
→瞑想の状態でのみ近づきうる、非人格的な最高の存在という神概念 ⇒**神の容器**

②**使命預言**（イラン・西アジア・西洋）…**行動的・禁欲的**

→現世を超越する、人格的な創造主という神概念（と強い親和性がある） ⇒**神の道具**

(①)**現世逃避的瞑想**：瞑想的に救済を所有している（=神の容器）と考え、現世逃避を徹底させていく。

(②)**現世的禁欲**：被造物的に墮落した人間を禁欲的な職業労働を通じて（=神の道具）、陶冶していく。



ウェーバーの中には、**発展段階論**（近代資本主義への道のり）があった。

（現世への順応→現世からの逃避→現世の合理的改造）

そして、**現世の合理的改造の段階まで到達しえたのはカルヴァン派だけだったので、ヨーロッパで資本主義が生まれたのだ、と主張したのである。**無論、このような発展段階論的とらえ方には多くの問題があるとと言えるだろう。

○日本の近代化と宗教—「プロテスタンティズムの倫理」は存在したのか？

・M.ウェーバーの見解

「日本人の生活態度の精神が持つ重要な特性は、**宗教的要因以外の全く別の事情、つまり政治的社会的構造の封建的性格**（←あまりに強い中央集権は、近代化にはなじまない。幕藩体制の分権性が、近代化に有利に働いた。）によって作られている」

明治維新時の日本＝「はなはだ有利な**白紙の状態**」にあった。つまり、**近代化を阻止または促進する宗教的要因が存在しなかったために、近代化が達成されたのである。**

このウェーバーの見解に対し、日本にも「プロテスタンティズムの倫理」と機能的に同等な要因があったのだ、と主張したのが、**ベラー**である。

・「恩と報恩」の論理—R・ベラー（Robert N. Bellah 1927-）の見解

神的なるものについての二つの基礎観念

①**至高的存在の観念**→次第に政治的上位者や両親に姿を変え、**恩恵に対する尊敬や感謝・報恩**を特徴とする。「おかげさまで」というような言葉にも表れている考え方。

②**存在の根拠、あるいは実在の内的本質**（「模範預言」的なもの）

大事なのは①である。ベラーは、これを「**恩と報恩**」の論理と名付けた。

慈悲深い存在者

恩↓ ↑報恩

人間（個人）

天と地と人から受けた恩恵に報いることを行動原理とする→人間の受ける恩恵が、それに報いる能力を超えて遥かに大きいから、人は決して償うことができない、という考え方に至る。これはまさに、「プロテスタンティズムの倫理」における、決して自分が救われているかどうかを知ることができないことによる、強迫的な「絶え間ない職業労働」と同じ構造である。

・丸山真男による批判

日本における特別関係主義 [=個別主義] は、疑似普遍主義の役割を演じたに過ぎない。そして、普遍主義的規準の低位という側面も考える必要があると主張した。つまり、日本の明治以降の近代化は、個別主義に収束してしまったのではないか？「祖先教」は日本でしか通用しない概念なのではないか？という考えを丸山は持っていた。

⇒丸山は戦後、普遍主義による、本当の意味での近代化を進めるべきだ、との立場に立った。

(cf. 「普遍主義」と「個別主義」：パーソンズによる「5つのパターン変数」の説明を参照。)

ところで、1980年代以降、「普遍主義的近代化」こそが、コロニアリズム（野蛮を文明に改めさせるのだ）を正当化する論理となってしまうのではないか、という批判が登場した。しかし一方で、「個別主義的近代化」もまた、ナショナリズム（我が国は特別なのだ）へとつながるという問題を抱えている。

9 宗教の社会学③—E・デュルケーム

○方法論的集合主義—『自殺論』（1897年）

社会的事実：個人に対して外在し、かつ個人の上に否応なく影響を及ぼすことのできる一種の強制力。社会を構成する個人は年々替わっていくにもかかわらず、社会そのものが変化しない限り、自殺者の数が変わらないことから、このようなものが存在することが分かる。

方法論的集合主義：社会を一つの物、つまり、個人を支配する独特の力とみなす考え方。

cf.方法論的個人主義をとるウェーバーならば、個人がなぜ自殺したのか（動機）を考えるはず。しかしデュルケームにとっては、個人の動機よりもむしろ社会全体の力のほうが重要だったのである。

・（データ資料）自殺率の統計

次の3つの国・時代で、自殺率の増加が見られる。

①1920～30年代のドイツ：ドイツ革命による、社会の価値観の根本的変動および、世界恐慌の影響？

②1950年代の日本：敗戦による社会秩序の変動

③1990年代後半からの日本：一般的には不況によるものだと言われるが、それだけが原因ではないのではないだろうか。今の時代は、後世から見ると、大きな社会の変化が起こった時代とされるのかもしれない。

・(データ資料その2) 自殺と失業率

日本では見られる両者の相関も、アメリカ・ドイツ・フランスでは見られない。このデータは、それぞれの社会の特徴を示しているのである。日本は、失業するとすぐに経済的困窮に追い込まれてしまう「滑り台社会」である、と言えるかもしれない。

・自殺の3類型

① 自己本位的自殺

社会の統合が過度に弱体化→個人の孤立(…自己自身にのみ依拠せざるを得ない)→自殺
プロテスタント信者の自殺率が高いことからわかるように、プロテスタンティズムの徹底した不可知論から生まれる、個々人のかつてみない内面的孤独化の感情が、自己本位的自殺へとつながる。

② 集団本位的自殺

集団の結合力が過度に増大→自我の不自由(…自己の行動の基軸が所属集団に置かれる)→自殺
兵士の自殺率が一般の市民よりも高いことがこの一例。

③ アノミー的自殺

既存の社会の秩序の根本的変革(例:恐慌、好況)→人の活動が無規制→苦悩→自殺
anomie=a(否定)+nomos(法律等の人間が自然の摂理とは別に作り出したルールがない状態)
⇔physis(自然の摂理)

・データでの例:旧東西ドイツでの自殺死亡率(対人口10万)

年次	旧西ドイツ	旧東ドイツ
1987	19.0	30.3
1988	17.6	28.7
1989	18.5	25.8
1990	15.6	25.4
1991	17.5	26.4
1992	16.7	22.2

東西での自殺率の差は、「集団本位的自殺」から説明されるだろう。ただし、90年から91年にかけての東ドイツでの自殺率の上昇は、「アノミー的自殺」から説明されるだろう。(東西統合による社会秩序の大きな変動)

以上見てきたことからわかるように、同じ「プロテスタンティズム」を分析しても、方法論的個人主義をとるウェーバーは、「近代資本主義社会」に、方法論的集合主義をとるデュルケームは、「自己本位的自殺」にたどり着いた。二人のアプローチの仕方が180度異なるがゆえに、見えてくるものも全く異なってくるのである。

○『宗教生活の原初形態』(1912年)

・対象宗教のあり方

ウェーバー = **洗練された宗教** (例：世界宗教)

→宗教は究極的な〈価値〉と生の〈意義〉に人々を近づける

デュルケーム = **宗教の原初形態**

→宗教は人と人をつなぐ役割を担う

・「宗教」の定義…聖俗の弁別を規定する「信念」およびそれに基づいて行われる「儀礼」からなる1つの体系で、信念を媒介とした組織「教会」において信者を結合させる。

<宗教の3要素>

- ① **信念** ←聖／俗の弁別
- ② **儀礼** ←同上
- ③ **教会** ←(集団的)統合

重要なのは、**個人を孤立させず、集団の統合を加速させるものこそが宗教である** (←「宗教的信念は、分有されるときにのみ、活動的である。」、と考えた点である。すると、教会の役割を衰退させ、個人の孤立化を進めたプロテスタンティズムは、宗教の異常形態だということになる。

(cf. ウェーバーの宗教の定義：「究極的な価値と生の意義」を個々人に教えるもの)

・「儀礼」の二側面—分離と統合、あるいは禁止と侵犯

消極的礼拝：聖／俗の**分離**を実現することを目的とする。

(日本での例：しめなわ、神社への階段など)

積極的礼拝：特別な時間にのみ、聖なる存在と「**結合**」することを目的とする。「結合」の体験は、集団全体で共有されるものである。→必ず、「**侵犯**」を伴う。

(日本での例：お祭りのときに御神輿をかつぐことなど)

宗教儀礼においては、上の二つともが不可欠なのである。

なお、「聖なる存在」には、プラスの意味で「俗」から分離されたもの(例：御神輿)と、マイナスの意味で分離されたもの(例：全身に入れ墨をした人)の両方がある。「お祭り」の場では、別の意味で「俗」から分離された二つの存在が結びつけられるのである。

供犠 (sacrifice)：信徒と神の両者が同じ食事を食べることで、**神との一体感と、信者の集団の一体感の両方を高める**ことを目的としている。

例：ダヴィンチ『最後の晩餐』：キリストの身体そのものを神に捧げ、それを弟子たちも一緒に食べることにより、一体感を高める。ただし、その中で、集団の外に排除される人が必ず存在する(裏切り者のユダ)。逆に言えば、宗教に限らず一般的な集団の性質として、**排除された者の存在によって、「集団の統合・統一性」は担保される**とも言える。

・トーテミズム—集団的アイデンティティの由来

トーテミズム…ある人間集団がある特定の種の動植物（＝トーテム）あるいは他の事物と特殊な関係を持っているとする信仰、およびそれに基づく制度。

（例：プロ野球のチーム 「オリックスバファローズ」「ヤクルトスワローズ」）

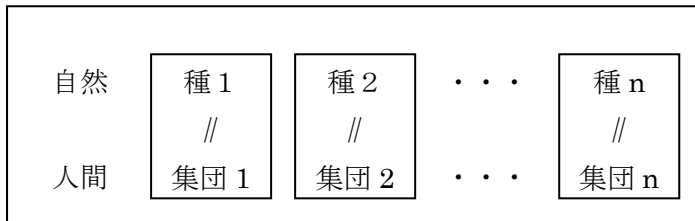
語源…[totem]（英語 1760年～）

→”ototeman”（北米のオジブワ族）＝「彼は私の一族のものだ」

模範的儀礼：人々が動物と似たような動きをする儀礼。トーテムと結合する「積極的儀礼」と言える。

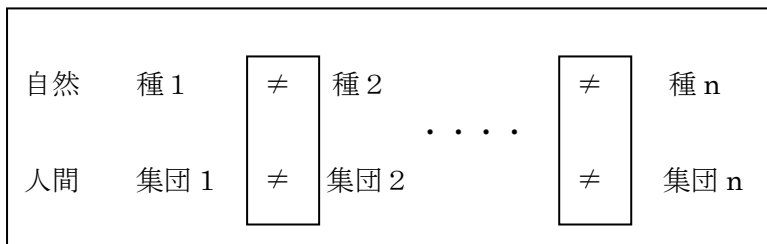
※デュルケームとレヴィ＝ストロースの解釈の違い

デュルケームのトーテミズム



トーテムは**連結の徴**であり、それを通じて互いに同じ集団の一員であるという意識を確認しあう。

レヴィ＝ストロースのトーテミズム



集団の同一性が担保されるのは、「差異」によってでしかない。（構造主義的）カンガルー族の同一性は、「エミュー族とは違う」ということによって担保されるのである。『最後の晚餐』の説明も参照。

・もう一つの逆転—「意欲する人間」の回帰

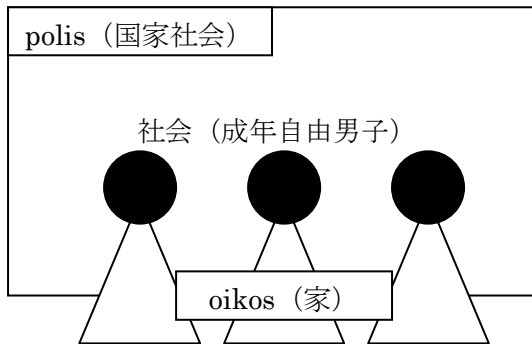
方法論的集合主義から分析を始めたデュルケームであったが、最後には、「社会は、個人意識のうちのみ、また個人意識によってのみ、実存しうる。」「すべてのものは聖なるものになりうる。あるものを聖なるものにするのは、かれらの信念である。」という、**方法論的個人主義的な結論にたどり着く**ことになった。方法論的個人主義をとったはずのウェーバーもまた、「意欲する人間により作り出された近代資本主義に、現代の我々は従わざるを得ない状況になっている」という方法論的集合主義な結論にたどり着いた。**社会学的思考の原動力であり、また弱点でもあるのは、社会と個人という、二つの視点の間を回転していく動きである、**と言えるのであろう。

#10 経済の社会学①—「社会的」という理念

社会学：1838年にフランスのA.comteが「sociologie」(=socius+logos)という言葉を使ったことから始まる。「社会学」の起源を考えるためには、経済の社会学を考えなければならないのである。

○「政治経済学 political economy」の誕生 (18世紀)

- | | |
|-----------------------------|------------------------|
| ・経済 (学) economy = oikonomía | |
| | ←oikos (家) + nómos (法) |
| ・政治 (学) politics = politiká | ←pólis |



成年自由男子のみが polisに参加できた。そして、polis と oikos は明確に分離していた。

economy = 家政

↓ 国家 (polis) 規模に拡張、分離

18C 政治経済 (political economy) と家庭経済 (domestic economy)

政治経済：物の生産・消費・流通を国家全体のレベルで考える。

☆アダム＝スミス『諸国民の富』

分業の進行→富の増大

→交換の加速・貨幣の浸透

↑

利己心

➤分業…生産工程分割し、ある部門に特化して生産に携わる。(→生産力と富の増大)

➤交換…自分自身の労働の生産物の余剰を、他の人のそれと交換する事で自らの諸々の欲望を充足する。
(→商業社会に成長)

➤貨幣…あらゆる商品と交換可能な特別な財。交換を促進する役割を果たす。

◎「利己心 self-love」→分業を促す原理

各人が利己心に基づいて利益を追求 (相手の仁愛にではなく、相手の利己心に訴える)

⇒意図せざる結果として、富が増大

◎見えざる手（自由放任）→古典派経済学

…国家による介入を排し、個人の自由な利益追求に任せれば、“見えざる手”による自動調整機能によって、調和のとれた経済秩序が形成されるとする考え方。国家全体から考えてはいけないのであり、一人一人の利己心を活性化させることで、結果的に国家全体が発展するのである。

○批判者たち—「社会的 social」なものの隆盛（19C）

18C political economy（スミスが大成）

19C 18C 的な political economy に対する批判・修正→社会学の誕生

・シスモンディ（J.-C.-L. Simonde de Sismondi, 1773-1842）

スミスの弟子として、スミスの理論をフランスに輸入した。しかしその過程でスミスに対して疑問を持つようになる。

- ・富の不平等な配分：生産が向上しても公平な分配が行われていない
- ・機械化の弊害（→失業）：機会が労働者に代わって生産を行うので失業者が増加。
- ・過剰生産の可能性：失業者はお金を持たないので、総供給が増加する一方で総需要は減少。
→需要と供給のバランスが崩れる。（当時のフランスの恐慌の最大の原因？）
- ・生産力の増大≠万人の幸福

※セイ（Jean-Baptiste Say）

セイはシスモンディとは「過剰生産の可能性」の考えが違う。

セイの法則

総供給＝総需要

（「すべての売りは買いである」）

（⇒シスモンディ…すべての供給が需要となる保証はない。買うことと売るとは別のこと。）

シスモンディの関心：生産力の増大（政治経済学の目的）ではなく、富の適切な分配。

⇒その後の社会経済学（économie sociale）・社会政策（Sozialpolitik）

・W・トムソン（William Thompson, 1775-1833）

英語圏ではじめて **social science** という言葉を、political economy と対立する概念として使った人の一人。

18C の political economy は生産のことばかり重点に置いている。

social science は、生産されたものをどう分配するかを考える。

→効用（utility）に基づく分配のあり方を考える

（効用：ある行為によって当人が得る主観的な満足感。ベンサムから継承した概念。）

「効用」概念によれば、より貧しい人に富を分配すると、効用はより上がる。

→「効用」に基づき、人々が平等となる分配が、社会全体にとっても良いのである。

・コント（Auguste Comte, 1798-1857）

political economy は、形而上学的（métaphysique）な傾向がある。つまり、現実を見ず、思索にふける傾向がある、と批判した。

⇒physique sociale (「社会物理学」と訳されることもあったが、これは誤訳であり、政治経済学のような métaphysique な性格を持たない、実際的な学問、という意味だと考えるべき)、さらには **sociologie** を唱える。

・エンゲルス (Friedrich Engels, 1820-1895)

イギリスで労働者の平均寿命が極めて低いのは、彼らから必要な生活条件を奪っている社会が原因である。その状況に対して社会は何もせずに放っておいている = **社会的殺人** (sozialer Mord)

⇒**社会主義 (Socialism)** の提唱

・「社会的な国家」 = 福祉国家と同義

例) ドイツ・フランスの憲法

19 世紀的な意味での「社会的」という概念が、現代にまで受け継がれているのである。

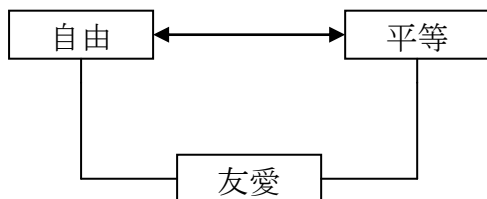
・まとめ

Économie sociale
Social science
Sociologie
Socialism

Political economy (18 世紀)	The social (19 世紀)
生産	分配
全体の不可視性	全体の可視化
不介入	介入

・19 世紀における「社会的なもの」

- ① 人びとの間に格差や不平等をもたらす力
- ② 自然ではなく、人間が生み出す力
- ③ 格差や不平等を是正していくための実践



フランス革命を支えた 3 つの精神。

19 世紀には自由と平等の間に深い亀裂が。これを橋渡しする概念としての「友愛」 = 「the social」

19 世紀の「社会的」には、「平等」という、強い価値が含まれていた。

しかし、「社会学の第二世代」とも言うべきウェーバーが、「社会学」の意味を大きく変える役割を果たした。

- ・社会科学の「客観性」「価値自由」
- ・「社会（科）学」≠「社会政策」「社会主義」

ウェーバー以降、社会学は価値を脱色されていくこととなった。

1 1 経済の社会学②—20C の資本主義

○マルクスの「政治経済学批判」(=『資本論』) ※レジュメの図も参照

マルクスは、19 世紀に生まれた「政治経済学」批判の集大成の役割を果たした。

・交換をめぐる 2 つの視点

① $W \rightarrow G \rightarrow W'$: $W \neq W'$ (質的差異) …「使用価値」の差異 ←スミス、セイ

質的差異があるがゆえに、交換は有意義になる。

② $G \rightarrow W \rightarrow G'$: $G \neq G'$ (量的差異) …「貨幣の資本への転化」

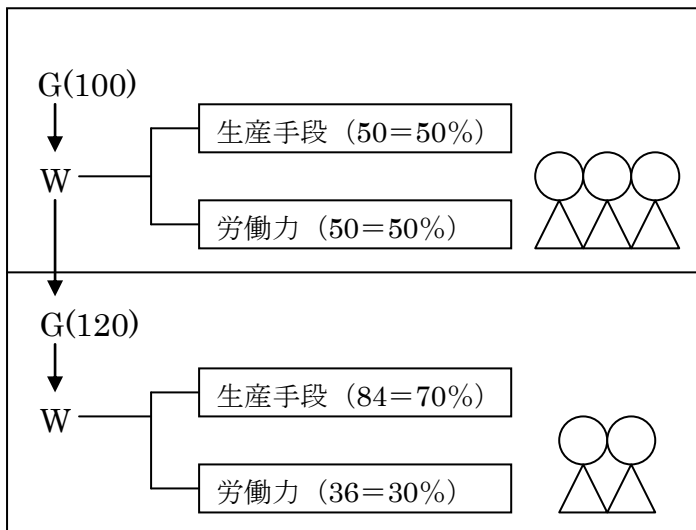
貨幣と貨幣の間には質的差異がない。しかし、例えば 100 万円が 120 万円になったとしたら、交換は有意義になりうるのである。マルクスは、貨幣の交換手段としての役割よりもむしろ、②の役割を最重視している。マルクスによると、「資本主義の精神」は、質的差異に基づいて交換が成り立っていることの必然的帰結なのである。

・「 $G \rightarrow G'$ 」のからくり—「労働価値説」と「搾取」

労働価値説…生産過程において加えられる労働力が、商品の剰余価値を生むとする説。

レジュメの図で説明すると、労働者は 70 の労働をしたはずなのに、手元には 50 しか残らない。そしてその差の 20 (剰余価値) は、金を出しただけの資本家のもとに行くことになる。=「搾取」

・過剰人口—なぜ失業するのか？



資本が増大すると、**資本の有機的变化**が起こる。つまり、労働者に支払われる賃金よりも、生産手段への投資の割合のほうが増大するようになり、結果として**雇用量の減少**がもたらされるのである。

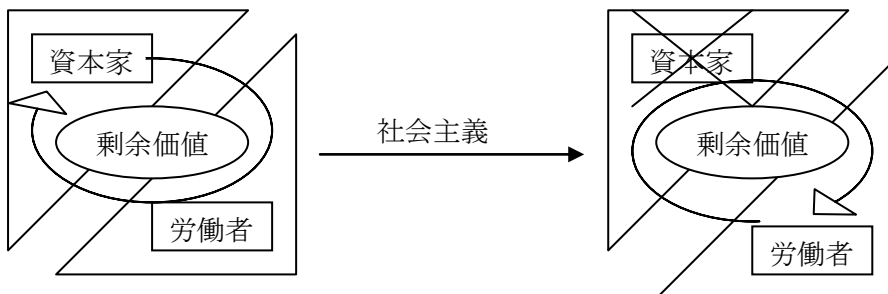
⇒**過剰人口**の誕生、資本の意のままになる**産業予備軍**の形成。産業予備軍は賃金がいくらであっても資本家に雇ってほしいと考えるので、ますます賃金は低下することとなる。

しかし、このような理論は、工業化の過程では成り立つかもしれないが、第一次・第三次産業では、現実にはなかなか資本の有機構成は変化することがない。この点で、マルクスの理論は破綻を見せているのである。

・過剰生産としての「恐慌」

搾取の結果として**労働者 (=消費者)**は窮乏し、消費制限をせざるを得なくなる。

すると、**供給と需要のアンバランス**が起き、**過剰生産**の状態に陥る。これが、**恐慌**の原因なのである。つまり、**過剰生産による恐慌は、資本主義自体が抱える内部矛盾なのだ**、とマルクスは主張した。



剰余価値が、労働者から資本家に一方的に流れている。

剰余価値を、労働者が自らの手に取り戻すことを目指すのが、マルクスの社会主義の考え方。

以下は最終日にやった分です。先生はかなり焦ってやった様子だったので、内容が薄くなっていますが、さすがに飛ばした部分からは出さないとと思うので、この程度を押さえておけば大丈夫でしょう。

・マルクス（主義）に対する批判

労働価値説は破綻している。

「限界革命」（1870年代）Menger, Jevons, Walras

: 「限界効用」概念の成立（ものの価値は効用によって決まるのであり、投入された労働量によるのではない。）

→新古典派経済学

○資本主義の自己調整

・ケインズ経済学

不況（生産と消費のアンバランスから来る）のときに、賃金を切り下げてしまえば、**有効需要の減少**につながってしまう。

⇒むしろ、賃金を上げることで、**有効需要を維持**することのほうが有効。

この方針がニューディール政策の基本。

・フォーディズム

フォードの“Welfare Capitalism”

1914年の社内改革：労働時間の短縮と賃金倍増

社員福利の拡充

労働者の私生活改善（→従わない場合、解雇）

⇒これらの改革により、「消費者を作り出す」（社員が、フォード社の車を買えるようにする）ことが目標であった。

フォーディズム＝大量生産・大量消費の体制。生産性上昇の成果を利潤として資本家が独占するのではなく、労働者の賃金にも分配することで、消費を拡大させる。そしてその消費の拡大が、さらなる生産性の上昇につながる、という体制のこと。

・「消費社会」の誕生

消費社会＝生産（供給）システムが自ら、消費（需要）を作り出すようになった社会。需要は、産業システムの外部に所与として存在するわけではない。

例：フォードとGMの競争

フォードがGMの戦略に敗れていく過程において、「消費社会」の到来は表れている。

T型フォード：画一的な大量生産

GM：毎年のようにモデルチェンジを行うなど、製品を差別化することで、消費を刺激する（←「自動車は見かけだけで売れる」）ことに成功。やがてフォードを追い越すこととなった。さらに、ローン制度の導入（フォードはこれを認めなかった）によって、人々に自分の収入以上の消費をさせることに成功した。

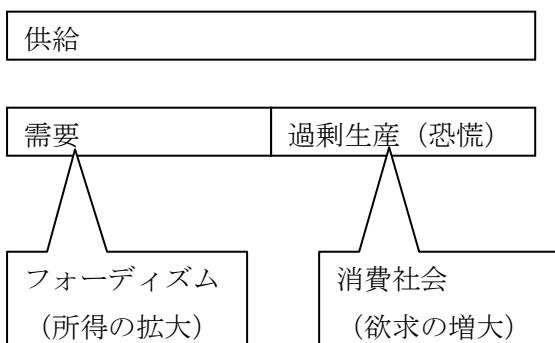
・モード

消耗のリズムを u 、購買のリズムを a としたとき、 a/u がモードである。

$u=a$ ：モードの不在、 $u>a$ ：貧困状態、 $u<a$ ：モードの存在

a が u を上回る割合が大きいほど、モードの支配力は強い。

・資本主義の自己調整システム（まとめ）



供給と需要のアンバランスを、フォーディズムと消費社会によって埋め合わせる。

ただし、フォーディズムは現代ではもう消滅した、との議論が主流。完全失業率（＝完全失業者数÷労働力人口）や、非正規雇用の増加が、それを示している。

#12 経済の社会学③ーグローバル化と資本主義

・データ資料

国民一人あたりの GNI（国民総所得）・一日 1 ドル以下の生活者の割合

→国の間の格差は非常に大きい。なぜ格差は生まれるのだろうか？

○20 世紀初頭の帝国主義論ーJ・A・ホブスン

帝国主義＝過剰な商品・資本の海外移転

ケインズ経済学の考え方が出てくる前の、資本主義の一つの自己調整法であった。

○経済成長の諸段階ーW・W・ロストウ

- (1) 伝統的社会
- (2) 経済成長への離陸
- (3) 成熟への前進
- (4) 高度大衆消費社会

それぞれの細かい内容は授業では省略。

どの国でも、いずれ最後の段階まで到達でき、また、スタートラインは平等である、という考え方が前提となっている。

⇒しかし、それは間違っている、と主張したのが**従属理論**と**世界システム論**である。

○批判ー従属理論と世界システム論

二つの理論とも、国々は一つの「システム」にまとめあげられており、その中の順位付けはいつまで経っても変わらない、と考えている。

・「衰退」を前提とした「発展」ーインドとイギリスの例から

ある国の発展は、衰退する他の国を犠牲にしている。

例：インドとイギリス

インドは、イギリス進出以前は、綿製品を中心的な輸出品としていた。しかし、イギリスの安い綿製品が流入しはじめると、インドの綿工業は壊滅してしまった。

→インドは、イギリスにとって都合のいい特定の一次産品を生産する**モノカルチャ**に再編成された（**奪工業化 de-industrialization**）。そして、戦後も、いつまでも**第一次産業にとどまること**となったのである。

従属理論

- ・「中心 core」に従属する「周辺 periphery」
- ・「低開発という開発 the development of underdevelopment」：インドがいつまでも第一次産業にとどまることになったのは、イギリスの工業の発展が原因であった。
このような国々が、本当の開発を達成するためには、社会主義の導入しかない、と従属理論は考えた。
つまり、システムの「外部」として、社会主義は存在したのである。
- ・不等価交換論：「周辺」に位置する国々の労働者の賃金は、「中核」の水準ではなく、「周辺」の水準で与えられる。⇒本来「周辺」に流れるはずのお金が「中心」にとどまり続ける。

世界システム論 (I・ウォーラーステイン)

- ・中核と周辺を媒介する「半周辺 semi-periphery」：成長の可能性は持っているが、中核に従属している点是不会らない。具体的には、韓国、ブラジル、インドなど、NICs と呼ばれる諸国。
- ・社会主義圏を含むただ一つの世界システム
社会主義も含むとしている点で、従属理論と大きく異なっている。

☆ 経済成長の諸段階論と、従属理論および世界システム論のどちらが、より世界の現実を説明するのに説得的なのだろうか？

後者のほうが、前提とする見方（スタートラインからして平等ではない）としては正しいだろう。しかし、従属理論の単純な二分法（中核と周辺）は修正されるべき（実際、ウォーラーステインは「半周辺」の概念を導入して修正を試みた）だし、どの国にも開発の可能性は宿っているのだというロストウの見方は評価されるべきだろう。

〈最後に一試験について〉

シケプリは以上です。先生が試験について話したことをまとめておきます。

「やった内容からまんべんなく出します。ヤマを張っても外れます。」

「記述は一つ、記号問題が半分くらいあります。」

「ちゃんと勉強すればできるので、そこそこ勉強してください。」

試験形式は、去年少し変わったようですが、今年はまたもとに戻るようです。大事だと思われる語句や人名は、しっかり押さえておきましょう。

試験は7月21日9時開始で、60分間です。寝坊しないように注意しましょう。